

探訪 北の風景 82

石狩川の港 江別市・江別港

青木和弘

江別は1935（昭和10）年まで、水運と鉄道をつなぐ道央の輸送拠点だった。石狩川河口の石狩から江別を中継拠点にして浦臼まで定期航路があり、定期船が発着する「江別港」があった。いま、付近に面影はないが、場所は江別市防災ステーションから眺める千歳川の対岸あたりだ。この防災ステーションには、その水運を担った外輪式蒸気船「上川丸」の実物大模型が展示されている。人気アニメ「ゴールデンカムイ」に、主人公が上川丸に乗船するシーンがあつて、船の描写が正確だとファンの間で話題になっている。そんな江別に思いをはせて、冬の江別を散策してみた。

明治の新政府誕生後、不満をいだく土族の乱が

頻発した。1874（明治7）年の佐賀の乱や1876年の萩の乱、1877年には西郷隆盛を大将とする西南戦争が起き、土族の囚人が急増した。政府は、彼らを北海道の道路建設などに従事させようと、未開の原野を拓き1881年、現在の月形町に樺戸集治監、幌内炭鉱が操業を始めた三笠市に翌年、空知集治監を設けた。まだ道路が整わない時代で、必要な食料や生活物資は、石狩から船で輸送した。

1882年に幌内鉄道（現在の小樽市手宮―三笠市幌内間）の「江別駅」が開業した。

1884年に開拓使は、外輪型蒸気船の神威丸を就航させ、集治監の物資輸送を担当させた。船底が平たい構造の外輪船は川の水深が1メートルほどと浅くても運行できる。明治22年に上川丸が就航。全長25メートル、60トンの石狩川最大の鉄船で、時速8ノット、定員60人だった。

石狩川と支流地域から集めた農産物は、船で江別港まで運び、江別駅で鉄道に積み替えて大消費地の札幌や小樽に届ける。一方、小樽や札幌から運んだ生活物資は、江別港から石狩川と支流地域に運ばれ開拓者を支えた。江別港と江別駅との間700メートルはトロツコで結んだ。物資の中継基地として江別は繁栄し、賑やかな市街地が形成された。

1886（明治19）年になると樺戸集治監や空知集治監の囚人によって上川道路（札幌―旭川間）

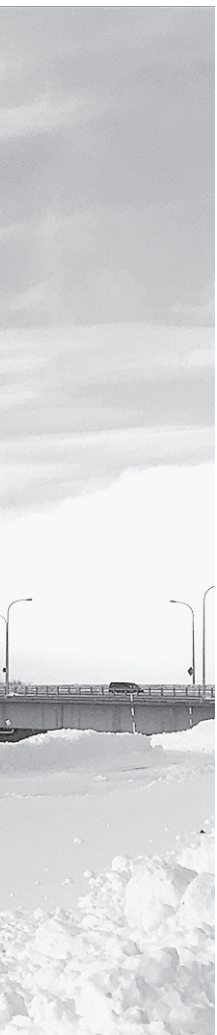


防災ステーション2階に展示されている江別港のジオラマ。外輪型蒸気船上川丸が貨物を満載したボートを引いて港に入るところ。1回に米300俵を運んだという。江別港の位置は、防災ステーションの対岸で、防災ステーション側ではない

の建設が進み、滝川や新十津川などへ入植が増えた。開墾で切り出した木材は砂川まで流す。最盛期の1900年ごろ、砂川には筏乗りが700人もいた。現在、特殊紙を製造する王子エフテックス（旧王子製紙）のある付近は、上流から筏で運んだ原木を引き上げる「網場（あみば）」が設けられ、製紙工場の貯木場に積み上げられた。

江別駅から千歳川にかけての江別中央地区には、倉庫や銀行、商店などが建ち並んで、往時の賑わいが偲ばれる。

そんな場所に残る市指定文化財の旧岡田倉庫は、「アーツスペース外輪船」として地域劇団の公演や音楽会などに利用されてきたが、この一角





江別市防災ステーションの裏から千歳川が石狩川に注ぐ河口方面を眺める。現在は特殊紙を製造する王子エフテックスの煙突から白い煙が上がる。その奥に北海道電力総合研究所があり、榎本公園などがある対厩である

江別市防災ステーションの1階に特産品売り場があり、二階はレストランや展示コーナーがあり外輪式蒸気船上川丸の模型が見られる



野幌にある赤レンガ工場跡(旧ヒダ工場)が改装され、商業施設「EBR1(エブリ)」として営業している

は堤防の拡幅のために撤去されるので、市などは、移転保存を検討している。
箱館戦争で旧幕府軍を率いた榎本武揚が後に開墾した土地が対厩(ついでしかり)にあり、榎本公園になっていて、そこが江別発祥の地とされる。江戸時代にツイシカリ場所が置かれたあたりだ。対厩は1876年、南樺太のアイヌ841人が故郷を離れ移住した地であり、そのうち340人ほどが、コレラと天然痘で亡くなっている。樺太アイヌの北海道移住は、2019年の直木賞作品「熱源」(川越宗一著・文藝春秋)にも登場する。
江別市の人口は11万9815人(2021年1月1日現在)。江別、野幌、大麻と、それぞれに見どころが豊富である。